

Title	對外交通史論(武藤長藏著, 東洋經濟新報社)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1944
Jtitle	史学 Vol.22, No.4 (1944. 11) ,p.116(486)- 118(488)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

まづ第一の英本國においては、これを著者は帝國の性格からして一つの自治領と見做し、自治領の地位に顛落せるものとして「下格自治領」なる名稱を與へ、その現状、住民（即ちアングロサクソン民族の構成）、その民族性等を明らかにし、第二のカナダ聯邦においては、これを「模範自治領」と呼び、その模範の意味、開拓の歴史、聯邦成立までの政治的發展よりして政治組織、經濟狀態、對外關係に亘つてこの聯邦の特殊性を究め、第三のオーストラリア聯邦と第四のニュー・ジールランドとは、これを共に「忠誠自治領」となし、前者においては、「英領濠洲」たる所以にはじまり、その探検開發、政治的發展、聯邦の勢力伸張、經濟、貿易などに説き及び、後者においては、英人の占有、經營の經緯を辿り、政治的發展、社會主義施設の發達に論及して、「歴史なき國」たるの特質を明示し、更に南阿聯邦とアイルとを以て「反抗自治領」となし、前者においては、歴史、聯邦成立、人種問題、政治などの諸問題を通じて、その「反抗自治領」なる本質を説き、後者においては、その民族、歴史、自治問題、土地問題、新憲法の制定などを論じて、イギリスに反抗しつつ獨立を達成するまでの經過を明らかに説明してをられる。全章の各項悉く深き御研鑽の結晶であり該博なる知識の集積である。

英帝國に關しては從來好著の刊行せられたものなしとせず、又各自治領を個々に取扱つた著述も極めて多いが、全自治領を包括せる英帝國を綜合的に研究し、英帝國および帝國内各自治領の性格を最も明快に説明せる本篇の如きは他に類を見ない。つとめて冗漫な論述を避け、説明を要する事柄に關しては一々詳細な註を

附し、讀者をして聊かも煩雜を感じしめない。筆者は全篇を一應通讀したのみであるが、幾多の新らしい知識を授けられ、また從來自ら解き得なかつた疑問にして、本書の知識によつてはじめて解き得たものが少くなかつた。廣く歴史・地理學徒及び一般讀書人に一讀をおすすぬめしたい。

筆者は、曾て學生時代、教授の第一次世界大戰後の新世界に關する御講義を拜聽したあの當時と同様の氣持で本書を讀み、その懐かしい思ひ出を以てこの粗雜な讀後感を綴つて紹介に代へる。

第二篇「アメリカ合衆國」と第三篇「アメリカ合衆國史」とは、第一篇英帝國を補つてアングロサクソン民族に關する完全な書を成すものである。藤原氏の擔當する第二篇においては、まづアメリカの處女大陸に起つた開拓線と關聯せしめてアメリカの國民性、政治形態を説き、次に合衆國の各地理區に就いて地理的乃至歴史地理的記述を試みてゐる。アメリカの研究者として既に立派な著述のある著者の筆に成るものだけに傾聽すべき論述が多い。更に菊地氏の擔當する第三篇は合衆國史の概説であるが、單なる事實の羅列に非ず立派な史論である。末尾のアメリカ史年表は苦心せられたものであらう、詳細であり、しかも十分信頼して利用することが出来る。筆者は既にその恩恵をうけた者として著者に心から敬意を表する。(有賀春雄)

## 對外交通史論

(武藤長藏著)  
(東洋經濟新報社)

經濟學者としての武藤博士の業績に就て吾々史學者は知る所僅

少であるが對外交通史關係に於ては同氏の綿密なる考證と其儘まざる探究とは常に吾々同學の畏敬する所であつた。今同氏逝いて後故人の愛弟子たりし山田憲太郎君が先師の殘されし數多き作物中特に對外交通史に關する短論文を蒐め、紀念として上梓されたものが本書である。卷頭に掲げられし小泉塾長の「篤學者耽學者武藤長藏博士」は昭和十七年八月の三田文學に掲載されしものであり、よく故人の學風を偲ばせるものがある。曰く「私は時々思ふ。學問のしかた、殊に歴史の書きかたには様々の流儀がある。或者は坦々たる大道を自動車で快走するやうに書く。出發も到着も共に正確である。途中で通過する都邑にも原野にも適度の比例に於て時間が費される。之に反し、或者は大道は行かず、徒歩で（或は日和下駄を穿いて）小路横町のある度に曲つて見る。さうして一つ一つの家の標札を仰いで見て、様々の發見をしては満足する。……さうして目的地への到着時などは構はない。武藤君のやり方に多少この趣きがあつたことは人も認めるであらう。勿論武藤君が自動車に乗らなかつたとは言はない。彼れの幾篇の著作は大道車行の産物である。しかし、彼れは自動車の車窓から沿道を眺めて何か目に付くと、すぐ下車して横町へ曲つて入つた。この下車が稍々頻繁ではなかつたらうか云々。」まことに武藤氏の學風は端的に云へば文献學的な所に精彩がある。かういふ方法は地味であるが東洋學の基礎的作業であり、世界各地の學徒の同種の勞作が相集積せられて將來綜合的な結果が編まれんことを目指してゐるのである。人文科學成果の組織的方面に缺陷ある我國に於ては博士の如き文献學的勞作を充分推重するには少しく早過ぎた

觀あり、故人の早逝の惜まれる所以でもあつた。

集められる所の論文九篇、その中最も興味多きは最後の「西曆千八百六十二年（我文久二年）長崎出島の和蘭印刷所刊行シーボルト氏藏書目錄」であり、博士が上田貞次郎氏記念論文集のため執筆せんとして果さざりしものである。たゞ残念なのは其第三章「太平洋問題、アジア諸地方言語學上の問題」が未定稿に終つたことであり、殊に現在に於て學界の注目を惹く南海に關し貴重なる資料を含むクロウフォードの「東印度辭彙」に就て何等叙及せず、終つてしまつたのは誠に遺憾である。その「廣東十三行圖説」は我田中萃一郎博士が逸早く「廣東外國貿易獨占制度」十三行の二篇を公けにせられてをるので吾人に縁故深く、またその「銀行會館なる名辭が約二百年前支那に存せし事實の發見」は本篇の發表當時「史學」の編輯に携はりし筆者が、加藤繁博士に請ふてその書評を頂戴して掲載せし因縁あり、今更感慨深きものがあつた。その外「長崎出島和蘭商館長の風説書」の註一にジャカルタの古名カラハに關して説明されてゐるが、此カラハに就ては故田中萃一郎博士の手寫本「カラハ總論」の存在を氏に話し、氏からその印行を囑せられ、氏の歿後に漸く部分的に之を果したので生前に氏の悦ばれる顔が見られなかつたのは残念である。由來筆者は故人の照會の手信に怠慢なる返信者であり、遺著を見るにつけ今更慙愧に堪えざるものがある。然しながら氏の雜誌編輯者泣かせも亦定評あるものであり、今日の如き印刷不便の時代になつては博士の論文を引受くる雜誌を見出だすに苦心されたことと思へば此點博士はよい時に此世を辭せられたと云ひ得るかとも思ふ。

冗談はさて置き、本書は故人の學殖を追憶するにまことによき論文集であり、本書の出版に盡瘁された山田氏の勞苦に謹んで感謝するものである。(松本信廣)

### 印度支那の民族と文化

(松本信廣著)  
岩波書店發行

著者は人も知る如くわが東洋學界に在つて常に新しい分野の開拓に力を盡され、殊に西南アジアの民族・文化・言語等を研究せらるゝこと己に歳久しいものがある。従つてこの方面の研究に於て著者は先覺者たるの榮譽を擔つてをられるのであつて、今日斯界の第一人者として重きをなしてをられるのも決して偶然ではないことを知らねばならない。

本書は著者が十數年來種々の機會に發表せられた論文八篇と著者の翻譯になるシュミット師の「日本語とオーストリツシュ語との關係」なる一文とを収録したもので、今日時流に乗じて盛んに世間に賣り出される際物とは全くその類を異にしてゐる。

本書の本文の目次をこゝに掲げれば(一)印度支那の民族 (二)印度支那の文化 (三)上代印度支那の考古學的研究に就て (四)有肩石斧の諸問題 (五)印度支那の言語系統 (六)江南の古文化 (七)日本上代文化と南洋 (八)チャムの椰子族と「椰子の實」説話、となつてゐる。何れも著者の多年にわたる研究の成果ならざるはなくすべて純學術的な立場に於て書かれたもののみである。従つて(三)(四)(五)(六)の各篇の如く考古學や言語學の素養がなくては充分にこれを理解する事が困難ではないかと思はれるものを見受けられる。然し(一)(二)(七)(八)の四篇は左程専門的な知

識を必要とはしないから何人にも容易に理解することが出來、相當興味を以て讀まれるに相違ない。

(一)の「印度支那の民族」に於ては印度支那半島に住む安南人・チャム人・カンボヂヤ人等十五種族について一々その住地・人種系統・人口・風習などが説明されてゐて、複雑な印度支那諸民族の概要を知るには最も好適である。

(二)の「印度支那の文化」は著者がその附記(一五六頁)に於て自ら言つてをられる如く主として安南を中心に印度支那の文化を概説したもので、古代の部分に於て詳しく近代に關して疎であるといふ憾みもないではないが、今日この方面のことを知らうとする者にとつては最も信頼すべき著述たるを失はない。

(七)の「日本上代文化と南洋」の一篇は實のところ筆者にとつて最も興味ある論文であつたが大多數の讀者にとつても恐らく同様であらうと考へられる。南方共榮圈への關心が俄かに昂つてきた今日わが國と南方との間に古來密接な關係が存したことを論證せるこの一篇に期せずして讀者の眼が惹附けられてゆくであらうことを想像すると微笑しくなるではないか。

日本列島が黒潮によつて遠く南洋の島々と結ばれてゐる以上、わが神話や言語やその他様々の生活様式の中に尠からず南方要素が混入してゐるのが發見されたとして或は當然であるかも知れない。然しそれにしても日本文化の形成を考へる上に極めて重要なこの南方文化の研究が從來の我が國では餘りにも閑却されてきてゐたのはどうした譯であらう。この點に深く思ひを致された著者は南方文化の性質を闡明することによつてそれが日本文化は固よ